

くすのき まさこ

## 【特別審査員賞】 楠 昌子

### 飼い猫への恋文

あなたがこつ然と姿を消した夜のことを思い出します。  
それは私のただ一人の妹が亡くなった夜に似ていました。  
彼女はもう二度と戻ってはきませんが、あなたは猫らしく、  
人間にはない動物の本能を酷使して、  
まるでちょっとバカンスへ出掛けて来た、という佇まいで  
帰還してくれました。

あの時私達夫婦は半分泣きながら、まだ越して間もない家の  
周りを、一睡もせずにも捜し回りました。藁にもすがる思いで、  
猫が無事に戻ってくるというおまじないだってやってみました。  
あなたが使っていた餌の茶碗を伏せて、和歌を置いて  
おくというものです。

『立ち別れいなばの山の 峰に生ふる 松とし聴かば  
いま帰りこむ』

平安時代の歌人 在原行平が詠んだという歌です。

猫探偵なる方へ依頼をしようかとまで思っていた矢先、  
あなたはふらりと家へ帰ってきました。

特に慌てふためくことでもないと言わんばかりのあなたの表情が  
忘れられません。

いまこうして、炬燵の中でふわりと丸まっているあなたに  
私の足先が触れると、何だか深く温かく言葉に尽くし難い  
心持ちになるのです。

ただそこに存在してくれている。

そのことがもたらしてくれる恵みは量りしれません。

いつも側にいてくれてどうもありがとう。

この先、あなたが戻ってこない休暇へ出掛ける日が  
いつか来るでしょう。

その日も含めてあなたを愛しています。

愛とは得てしてそういうものらしいのです。

